CM撮影風景 in ドイツ

ドイツ伝説の守護神　オリバー・カーン氏出演
テーマは「キーパーコーティング」で守れ！

（4月から放映するCMの画面）

今回は30秒で

今回のテレビコマーシャルは30秒で、キーパーコーティングの信頼性と力強さを表現する。

オリバー・カーンはドイツナショナルチームのゴールキーパーとしてだけでなく前々回のワールドカップでの活躍ぶりと共にその力強さと人間味あふれるキャラクターが世界中のファンの心を掴んだ。ドイツにおいては国民的英雄として神様的な存在らしい。そんなオリバー・カーンがキーパーのCMに出演してくれることになったのは、詳しい経緯は知らないが、奇跡的な出来事と聞いた。（本契約はオリバー・カーンと同郷のSONAXの力添えにより実現した）

今回のCMのテーマは「キーパーコーティング」で守れ！とした。オリバー・カーンこそ、このテーマにぴったりの人選であると言えるのではないだろうか。

SONAXの存在もCMに

加えて、「信頼性」を強調するために、ダイヤモンドキーパーを共に開発し、製造しているSONAXの存在をCMの中で紹介することになっている。

SONAXの研究開発の責任者である化学博士マンフレッド ピッチ氏（Dr．ピッチ）とは、もう何年来のお付き合いであり、Dr．ピッチの家庭にお邪魔したり、一緒に沖縄に行って高温でのテストを行ったり、何度も厳しい議論を交わしたりの度重なるコミュニケーションでかなり深い信頼関係を築いてきた。だから、今回の彼の研究室を公開してのCM撮影にも快く応じてくれた。

撮影の為の化学研究室

撮影の為に用意された化学研究室。実は、ここは企業秘密の固まり様な所でそのため他社に見られたくない物をすべて撤去したあとの様子。本当の研究室の様子とは若干違う。日本からやってきた撮影班によって準備が進む。約一時間の準備のあと、リハーサル。そして本番。Dr．ピッチをはじめとする研究チームは最初から動きが良く、7テイクほどでOKが出る。次にDr．ピッチのアップシーン。カメラが回っていない時はジョークを飛ばし続けニコニコしているが、カメラが変わると真剣な化学研究者の表情に一変する。まるで一流の役者のようだ。撮影は2時間ほどで終わってしまった。すでにSONAXのスタッフの方たちによって準備がほとんど出来ていたことと、本物の研究室の素晴らしい俳優ぶりで、予定を大幅に上回るペースで終わった。

翌日の「オリバー・カーン」撮影について討論

ホテルに帰って、翌日のオリバー・カーンの撮影について、江口監督、加藤クリエイティブたちとその方法や、考え方について議論をする。世界のサッカーファン、オリバー・カーンのファンをがっかりさせるような絵は作れない。すべての人が妥協することのない議論だ。

議論をしたのは、世界的な知名人でありドイツの国民的英雄であるオリバー・カーン氏をCM映像とスチール写真に撮るにあたって、「どんな表情を求め、どんなポーズを撮るのか」ということであった。あまりにもコマーシャル的なポーズは、かえって全国のサッカーファンをがっかりさせることになりCMとしての逆効果になるのではないか。

不自然なポーズをしてもらうことなくオリバー・カーン自身の表現で、彼が持つ力強さと信頼感を自然に出してもらった方がいい。そんな結論で一致した。とにかく、彼の魅力を短い時間で100％引き出せれば大成功である。

撮影のためのセットはすでにでき上がっている

撮影スタッフは日本から5名、ドイツから2名。少数であるが、屈指の精鋭である。機材はドイツ・ミュンヘンのスタジオ近くに撮影照明のメーカーがあって、レンタルで調達している。スタッフはすでに何日か前に現地に入り、ずいぶんの苦労の末にここまで作り上げたらしい。何気なくある物が、それぞれにこだわりを持って造られた労作だ。

オリバー・カーンにはオーラが

オリバー・カーンがやってきたのは渋滞のため少し遅れたが、予定にまったく問題はない。初めて会ったオリバー・カーンは、存在感にあふれ、強く透き通ったオーラが漂っている。彼がスタジオに現われ、そばを通ると爽やかな風が吹き抜けた感じだ。

オリバー・カーンは名優だった

画面の中のオリバー・カーン。止まっている様に見えるが、画面の中では豊かな表情とアクションが繰り広げられ、彼の考えで次々とそのセリフにも表現が加えられて、撮影が驚くほどのスピードで進んでいく。彼の表現の豊かさとスピードには撮影スタッフも驚いていた。オリバー・カーンは名優であったのだ。

撮影が一段落するたびに、モニターに再現された自分の姿を自らチェックし、「何テイク目が良かった」と、納得する。私の真横に来て、立たれるとその大きさと迫力にたじたじになる。たとえば目のアップ。まったくの濁りもなく透き通った目だ。じっと見ていると吸い込まれそうな気がする。ムービーの撮影が終わった。2時間以上かかる予定であったが、わずか1時間で終わってしまったのは、彼のカンの良さと、表現の豊かさのおかげである。

スチール撮影も順調に

昼食後、スチール撮影の番だ。（ちなみにカーンは寿司が大好きだそうで、昼食においしそうに寿司を食べていた）

スチール写真もペースが速い。スチール写真の撮影も一段落する。みんなで一緒に、撮れた写真を確認する。今度はカーンがアドリブで考えたポーズを次々と撮っていく。撮影が始まってから約4時間後、すべての撮影が終わり、くつろぐオリバー・カーンとマネージャー。三人のドイツ語を話せる日本人通訳さんたちと会話が弾む。

急遽もう一本CMを作ることになったワケ

今回のドイツでの撮影は、ギリギリまで節約して作ってもらった。まだオリバー・カーンの出演OKが決まっていなかった時点で、去年11月、東海四県でのCMを実行する期限が近づいたので、一時はオリバー・カーンをあきらめて、地元の三人のゴールキーパーハンドボール、サッカー、アイスホッケーの選手に主演いただいて1本CMを作っている。それを作り終わってから、急にオリバー・カーンの出演OKが来て、どうしようかものすごく迷ったが、こんなチャンスはそうそうあるものではないので、もう一本CMを製作することにしたのだ。

先に作ったCMのキーパー施工作業の部分はそのまま使うとして（編集はし直すが）あとは全部作り直しで、丸々、予算オーバーで作ることになった。だから、製作担当のADKに無理に無理を承知で、超節約型の低予算でのCM製作をお願いした。

制作も超節約型

もちろん、製作そのものも超節約型である。オリバー・カーンの事務所からもらった撮影のための時間はわずか8時間。本番までにいかに準備が万全になっているかが勝負である。前準備のために先月ADKの加藤クリエイティブと、アイ・タックの畠中常務にドイツに行ってもらい、手配出来るだけの手配は済ませている。本番スタッフがドイツに来てからの本番準備には念を入れすぎるくらい念を入れたそうだ。しかしいざ本番で、何かちょっとでも手配漏れ、準備漏れ、打ち合わせ漏れがあったら、たった8時間の間にムービーとスチールの両方の撮影をする強行軍では、ミスを取り返すだけの時間はない。本番ギリギリまで、加藤クリエイティブは胃が痛む思いであったという。

そして、本番の日。前日、SONAXの研究所での撮影も順調に終わっていて、最後のいよいよ本番である。幸い、オリバー・カーンのセンスのいい名優ぶりとスピードで、予定の時間を大幅に余らせて、本番を無事、思った以上の成果で終えることが出来た。

本物のプロとは

撮影中は、どのスタッフもそれまでの準備に大変苦労していることなどまったく感じさせない飄々ぶり。淡々と、怒鳴り声などもちろんなし、静かに、当たり前のように本番は終わった。プロの仕事はこういうものだ。苦労とか、必死とか、切羽詰ってなどという場面は一度もない。はたから見ていると、当たり前のことを淡々とこなしているしか見えない。

私たちの洗車、コーティングなどの作業でも同じで、本当に上手いスタッフはすべての作業を、いかにも簡単そうに楽々とこなしていく。しんどいような表情も、場面もまったくない。本当のプロの仕事って、必ずこうである。

ご期待ください

これで長い時間と、たくさんの人が奔走した、想像以上の苦労で準備したオリバー・カーンの撮影が終わった。日本に帰って、これが編集されるとどんな映像になるのだろう。わくわくするような、ちょっと怖いような。

連載 オリバー・カーンの時代 その1

FIFAワールドカップ2002、予選リーグ唯一の失点

ロスタイムもまたゲーム時間のうちである。

だから、勝っているからといって、決してここで気を緩めてはいけない。同じく、負けているからといって、決して諦めてしまってはいけない。

「サッカーとは、90分戦って最後はドイツが勝つスポーツだ」と、ライバルのインググランドのかつてのエース・リネカーに言わしめた強豪ドイツと、決して強くないアイルランドの試合であれば、誰もが、試合は予定通りドイツ勝利で終了、と思ったに違いない。

戦術はナイアル・クイン

そのとき、ドイツの選手が中途半端に蹴りだしたボールをアイルランドのディフェンダーが、もはや愚直と言っても許されるであろう、ドイツの攻撃を止めたら、ただひたすらドイツゴール近くで待っているフォワードのナイアル・クインに向けて、試合始めから続けているロングボールをまたも蹴ったのだ。

そのボールはナイアル・クインに届き、そして、クインは屈強のドイツディフェンダーに競り勝ってゴールの正面にボールを落とした。

その、まさにその一点しかないボールの落下点にわき目も振らずに走り込んだのが、アイルランドのエーススライカーのロビー・キーンだった。

カーン、大爆発

世界中が驚いただろう。競り勝ったキーンだって、撃ったキーンだって、監督のマッカーシーだって、みんな驚いたに違いない。

あの、世界一のゴールキーパー・カーンから得点し引き分けたのだ。番狂わせだ。気を持たせないようにこの先のことを言えば、ドイツは次の試合で気合を入れなおし、予定通り決勝トーナメントに進出、そしてアイルランドもめでたく決勝トーナメントに進出した。

予選リーグ3試合で、総得点11点、総失点1点。

つまり、この、ロビー・キーンのゴールしか与えずに、カーンのドイツは予選を首位で乗り切った。彼らの実力からいえば当然のことである。

だが、私がカーンを凄い奴だ、と思ったのは、この失点わずか1点ということでも、真っ直ぐ走ってくるロビー・キーンを怖がらずに真正面から立ち向かっていった鬼の形相でもなく、この試合の後で、あんなに安直にゴール前まで届くロングボールをアイルランドディフェンダーに蹴らせてしまった前の選手たちに対して、なんとロッカールームで3時間も怒鳴りまくった、という話を聞いたときだった。

ふむ。

まさにゴールキーパーの魂そのもの。あの風貌は伊達じゃない。

私はオリバー・カーンという選手に興味を持った。

（続く）

〈筆者は弊社フットボールピープル〉